

万葉集

新元号「令和」の誕生で、その語句の源となった万葉集への関心が高まっている。しかも、その舞台となったのは同じ福岡県の大宰府。北九州にとっても密接な関わりがあり、万葉歌からは当時の北九州の人、歴史も偲ばれる。各地にある万葉歌碑から、その一端をうかがう。

北州市内の碑 旅人の心を歌う

北州市小倉北区内の小倉城近くの新勝山公園。その一角に6首の万葉歌の碑が立つ、昭和46年1月、市、郷土、文学を愛する市民が中心になって整備、「万葉の庭」と名付けられた。一首ごとに、歌を刻した本碑と分かりやすいように添えた副碑がある。その中から一首。

豊国の企救の長浜行きくらし
日の暮れゆけば妹をしぞ思ふ

作者不明
（原文はすべて万葉仮名。以下同）

この歌を初めとして6首のうち5首はいずれも豊国の企救、長浜や高浜などを歌ったもの。企救の長浜、高浜とは現在の門司から小倉を経て戸畑までの海岸地帯のことで、かつて白砂青松の長い浜が展開していたと考えられる。他の1首も、戸畑のやはり海岸を題材にした作品。

ほととぎす飛幡の浦にしく波の
しばしば君を見むよしもがな

作者不明

これら北九州の海岸地帯が多く読まれていることに、梅光学院大元教授の国文学者・島田裕子さん（70）は研究ノート「北九州の万葉歌をめぐって」で、当地は九州の地に広がる官道・西海道の事実上の起点。歌はこの地へ下った国司たちの往来、租庸調の運搬、防人の移動など人々が行き交った証である」とし、最初に掲げた歌について「離れている妻や恋人、故郷のことを思



香春町鏡山に眠る河内王の陵墓参考地

う旅人の心を詠み、旅の辛さを慰める望郷の歌になっている」とする。
市には、他にもこの歌の碑のある小倉北区長浜の貴布祢神社、戸畑区夜宮公園、八幡西区黒崎の岡田宮、若松区にも歌碑が立つ。

多彩な香春町 人を引き付ける

遠のみかど大宰府と豊前国府（豊津町）、企救（北九州市）を結ぶ官道の分岐点で重要な宿駅が香春町であった。その重要性は近世まで変わらず、小倉藩が小倉城を自焼して去り、新たな藩庁を置いたのも香春だった。現在までに、香春町関係の万葉



新勝山公園の万葉の庭に立つ歌碑

歌は7首確認されている。

豊国の香春は我家紐の児に
いつがり居れば香春は我家

抜気大首

抜気がどのような人なのかは全く不明。大宰府へ任官途中の官人だと考えられるが、紐の児という女性といれば心もなごみ、我家に在るような気がすると旅中の心情を吐露している。

香春にはこのほか、^{スラフクリスダグ}按作村主益人という工匠巧みな帰化人系の人の歌も残されている。同町には宇佐神宮の神鏡を铸造し、鏡山という地名もあり、朝鮮半島からの铸造技術が根付いていたことがうかがわれる。

また、この鏡山には往時の皇族河内王が眠る勾金陵墓参考地

がある。王は天武天皇の孫で、持統天皇3年（689年）8月、大宰帥に任ぜられ、同8年（694年）、没した。自ら望んでこの地に葬られたといわれる。その妻手持女王の悲歌3首が残されている。

王の親魂

（和魂などの解釈もある）

逢へや豊国の
鏡の山を宮と定むる

手持女王



若松区で古賀梅香さんが建立した万葉歌碑と、紹介する子息の古賀文敏さん

みやこ町豊津にはまた、かつての豊前国府所在地だったことを示す豊前国府跡公園を整備し、国府にちなむ12首の歌碑を「万葉歌の森」で紹介している。これら歌碑の多くは一般的に市町村、文化団体などによる建立が多いが、北九州市若松区の大友旅人従者の歌碑は、万葉歌をよくなく愛した女性古賀梅香さんが、香春町の「梓弓引き豊国の鏡山」の碑は町教育委員村上利男氏が生前に鏡山を好きだった父親をしのんで建立したという。人それぞれに古歌に親しみ、愛することは、人を知り、愛することでもあるのかもしれない。

シニアスタッフ 村田和夫

北九州歴史文化塾

万葉歌碑めぐり 〜豊国の鏡山〜

万葉集は全20巻で4516首を収めている。本記事では、うち北九州市を含む豊前の国に關係すると思われる歌をいくつか紹介した。その歌の中にはキク、カハル、鏡山など現在もなお生き、あるいは近世まで使われていた地名がある。その地には今、歌碑が立ち、往時の歴史、人、文化を偲ばせる。うち北九州市の新勝山公園と香春町の碑を訪ねます。

第33回 北九州歴史文化塾 行程表

時間	行程
10:00	城野駅南口集合
11:15	鏡山神社（田川郡香春町） 河内王の墓（宮内庁管轄）
12:30	（昼食各自）道の駅 香春
13:30	香春町歴史散策
16:00	城野駅南口解散

開催日時 9月26日(木)10:00～16:00
集合場所 城野駅南口
講師 北九州シニア応援団スタッフ
受講料 SAKURA 倶楽部会員 2000円
一般 2500円
(車・保険込) ※昼食各自
参加お申し込み・お問い合わせ
さくら編集部 ☎ 093-965-6080